

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 **Urban Pastoralism in Theodore Dreiser's Works**  
(セオドア・ドライサー作品における都市的パストラリズム)

氏 名 土屋 陽子

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、主に 19 世紀から 20 世紀の世紀転換期に活躍したアメリカの自然主義作家セオドア・ドライサーの長編作品の中に寓意的に示された「都市」と「牧歌」の関係と、それに対する作者の態度の変化を読み取ることである。

ドライサーは、その著作を通じ、シカゴ、ニューヨークといったアメリカの大都市の現状をありのままに描いた作家である。生涯を通じ、ドライサーは 3 部作を含め 8 編の長編小説を執筆するが、そのほとんどにおいて、19 世紀後半の都市社会が舞台となり作品の重要な要素の一つとなっている。従来の研究が多く指摘してきたように、彼の作品には都市社会で生きることに対する希望と失望、理想と現実、成功と脱落が描かれており、それらの中で翻弄される人間の存在の弱さ、個人の意志の無意味さが示されている。ドライサーを都市小説家として捉え、その都市描写が示す反道徳性を検証する傾向が従来のドライサー研究では主流であった。しかし、世紀転換期の都市を描く作品を読む際、その対極となる自然の描写についても忘れることは出来ない。本研究では、3 部作の 3 作品目でありドライサーの晩年の作品でもある『禁欲の人』を除く彼の長編作品をすべて取り上げ、世紀転換期のアメリカ都市社会において自然の示す牧歌的理想像が人々にどう影響を与えたかという点が、それぞれの作品の中に如何に示されているかを論じた。故、本研究の独自性は、ドライサーのほとんど全ての長編小説を取り上げ、従来の研究では注目されることの少なかったドライサー作品における「牧歌」、あるいは「自然」の描写に着目したという点にある。

「都市」と「牧歌」の関係に関する問題がドライサーの作品の中でどの様に示されてい

るのかという読解から明らかになったのは、反因習的見解で知られるドライサーが実は牧歌的な価値にも重要性を見出しており、都市小説家の代表として知られる彼の作品の中に、実は田園小説的要素も見ることができるということ、そして、彼の作品には当時の都市社会において「都市」的価値と「牧歌」的理想が不安定な関係にあったことが描き出されており、「都市」と「牧歌」の共存の可能性に対してのドライサー自身の見解の移り変わりが作品を通して見られるということである。また、それらは各作品の中で登場人物を介し寓意的に描かれている。

第1章では、ドライサーの処女作『シスター・キャリー』を取り上げ、都市小説の代表作として知られる本作品の中にも「田舎」の面影が見られることを明らかにする。本作品の中で都市に対する田舎の存在はドライサーにより排除されているかのように見える。しかし、主人公キャリーの背後にある田舎の面影に注目しながら本作品を読むと、本作品を通して田舎の存在がキャリーの描写と関連しながら示されていることが分かる。また、揺り椅子に揺られ思慮するキャリーに示された中間的なイメージには、都市化が進む社会の中で、都市的価値と牧歌的理想に挟まれた当時のアメリカ社会の不安定さを読み取ることができ、都市化の影響を受けた人々の牧歌的理想に対する憧れも読み取ることができる。本章では、そのような読みをすることで、都市化を体現しているかのように描かれたキャリーが実は当時の人々の抱く牧歌的理想も示していることを明らかにし、都市小説として知られる『シスター・キャリー』がドライサーのパストラリズムの助走となっていることを指摘する。

第2章では、『ジェニー・ゲアハート』を取り上げ、都市と牧歌の関係が登場人物によりどの様に示されているのかを考察し、更に、主人公ジェニー自身が「牧歌的理想」と「都市化」という二面的な要素を示したものとして描写されていることに着目する。ジェニーと彼女の愛人レスターの関係を牧歌と都市の関係として寓意的に読むと、そこには、ジェニーの都市化、すなわち都市化していく田舎の存在が示されていることが分かると同時に、ジェニーが、レスターの都市社会からの逃避先として存在していることも分かる。さらに、ドライサーはそのようなジェニーを最後まで好意的に描いている。本章では、そのようなジェニーの描写により明らかになるドライサーの都市的価値と牧歌的理想の共存に対する肯定的な見解を指摘する。

第3章では、前2作とは異なり社会的強者を主人公に都市社会を描いた『欲望3部作』の特に第1、2部『資本家』と『巨人』を扱い、そこに描かれた都市と牧歌の関係を、主人公の女性関係の変遷から読み取る。本作品を都市と牧歌の問題と関連付けて読むと、都市社会を生きる資本家、主人公クーパーウッドが都市を体現するものとして、また、彼と関

係する女性達が牧歌を体現するものとして示されていることが分かる。本章では主人公と関係を持つ女性達の中でも特に重要な役割をしていると思われる3人の女性を取り上げ、その描写の変化に示された都市と牧歌の関係の変化を考察するとともに、両者の関係に対するドライサーの見解が懐疑的で両義的なものになってきたことを明らかにする。

第4章では、同じく社会的強者を主人公として都市社会を描く『天才と呼ばれた男』を扱い、『欲望3部作』と同様、そこに描かれた都市と牧歌が混在する当時の都市社会の不安定な現実を読み取り、ドライサー自身の、都市と牧歌の共存に対する懐疑的な見解を考察する。本作品には、主人公の、「芸術」と「商業」の間における葛藤と、性的問題を巡る「因習的価値」と「都会的価値」の間における葛藤が相互に関連しながら描かれており、そこに「都市」と「牧歌」の関係を読み取ることができる。本章では、本作品における都市と牧歌の二項対立を「都市（主人公ユージーンの愛人）/商業」vs.「牧歌（アンジェラ）/芸術」という図式で捉える。さらに、「牧歌/芸術」の項の中にも対立する関係が生まれていることに着目し、「芸術」界にみられる都市化の影響を読み取る。そうすることで、ドライサーが本作品において、『欲望3部作』で描いた、都市と牧歌が混在する当時の都市社会の不安定を、本作品においては芸術という文化的側面を媒体に示し、自身の都市と牧歌の関係に対する懐疑的な見解を改めて示したことを指摘する。

第5章で扱う『アメリカの悲劇』においてドライサーは、視点を地方社会へ向け、寓意的というよりもむしろ、地方社会の自然そのものの都市化を描いている。本章では、都市化が自然空間を舞台にどのように描かれているかを検証し、都市と牧歌の関係に対するドライサーの否定的見解を読み取る。本作品の中でドライサーは、これまで神聖なものとして扱われることの多かった湖を舞台にクライドの悲劇を起こし、自然社会の都市化を描くと同時に、地方社会に依然残る慣習も湖を介し示している。都市化の影響を受ける地方社会の不安定な実態を湖を介し示しているのである。そして、地方社会を舞台に都市化を描き、そこから生じる問題を示すことで、都市と牧歌の理想的な関係に対する彼自身の比較的否定的な見解も示しているのである。

第6章では、ドライサーの最後の長編作品である『とりで』を扱う。ドライサーの死後出版された本作品は、敬虔なクエーカー教徒である主人公ソロンの生涯を中心に、その一家の生活を描いた作品である。宗教をテーマとした内容と、人生の悲劇を経験したソロンが自然の中に絶対的な神の存在を再認識するという結末から、一般的に本作品は、自然主義作家ドライサーらしからぬ宗教的な作品であると言われている。しかし、本作品も作品の背景となるのは、他の作品と同様資本主義社会であり、「都市」的価値と「牧歌」的理想の対立関係が大きなテーマとなっている。本章では、その対立関係が、信仰を重んじるソ

ロンと華やかな世界に影響を受ける子供達との対立に示されていることに注目する。そして、牧歌的な理想主義に基づくバーンズ家の精神が、都市的な物質主義に基づく時代の精神と対立していることを指摘する。次に、その対立に介入し、「別の世界への扉」となって時代の精神を子供達に伝える役割を果たしている二人の叔母の存在に着目する。そうすることで、ドライサーがこれまで牧歌を象徴するものとして描いてきた女性を、本作品の中では都市化を推進していくものとして描いていることが分かる。つまり、本作品に描かれているのは、絶対的な都市の力であり、都市化によって作られた新しい社会構造なのである。そのように考えることで、『とりで』を保守的な作品だと捉える従来の解釈とは異なる読みを提示し、本作品にこそ社会とその変化をありのままに描こうとしたドライサーの自然主義的見解がみられることを明らかにする。

本研究の結論としては、次の2点が挙げられる。まず、その都市描写と反因習的見解を示したことで知られるドライサーが、実は自然のもつ牧歌的価値にも重要性を見出しており、都市小説家として捉えられてきた彼の作品の中には、田園小説的要素もみられるということである。そして、それぞれの作品における都市と牧歌の関係性の描写の変化からは、ドライサー自身の都市と牧歌の問題に対する見解の変化を読み取ることが出来る。ドライサーの、当初は都市と牧歌の共存に対し肯定的あるいは両義的な見解を示していたながらも、晩年においては、避けることのできない都市化の影響力を認めざるを得なくなった見解の推移が読みとれるのである。都市小説家と言われるドライサーではあるが、都市のみでなく、都市と田舎の関係性を多様な視点から捉えたドライサーの作品こそ、世紀末の都市化するアメリカ社会における都市と牧歌の関係性、その不安定さを理解するのにまさに適しているのである。

